

ブルキナファソにおける農業技術の変容とその背景

—中央北部州バム県の村落を事例に—

町 慶彦

キーワード: 農業、ディゲット、ザイ、普及活動、定着、労働者の流出

1. 背景と目的

1970年代から80年代にかけて西アフリカで発生した大干ばつ以降、ブルキナファソ中央北部州では砂漠化対処における農業技術ディゲットとザイの普及活動が国際機関や民間団体によって広範囲かつ長期間行われ、農民はこれらを採用したことによって実践する技術は変容していった。ディゲットとは農地の等高線上に石を積み重ねて並べ、水食を防止する技術であり、ザイは農地に30cm程の穴を複数掘り、その中に堆肥を入れて播種をし、土をかぶせる技術で、土壌を保全する効果がある。しかし、このような普及活動において普及方法に課題点が多く、最適な方法が模索されている。ここにおいて、本研究ではディゲットとザイの普及活動が行われた村落を調査地として、普及の実態と社会背景を明確にし、さらに定着の要因を明らかにすることで、自律的な技術の普及を促す最適な方法を提示することを目的とした。

2. 調査地域と調査方法

現地調査を2012年9月～2013年11月までに4回、合計5ヵ月間行った。調査地はブルキナファソ国中央北部州バム県で、調査村には普及活動が実施されたヤルゴ村とフル村の2村を選定した。調査は世帯主を対象に家族状況や生業、農業技術の実践に関わる聞き取り調査とGPSを用いて技術を実践した農地の位置情報の取得、また、地域情報や農業技術、普及活動に関する資料収集を行った。

3. 結果と考察

調査地の住民は農業を主生業として自給作物と換金作物の生産を行い、牧畜や金採掘、薪採集、地酒造りを副生業として現金収入を得ていた。特に金採掘においては2003年のブルキナファソの鉱業法の改正以来、近隣の金鉱で働く人が増加した。一方、コートジボワールに移住して、カカオやコーヒーのプランテーションに通年携わる人が多く、加えて、村の習慣によって女性は婚出することになっていることから、村内における15歳から64歳の労働者層が流失していることが明らかになった。

農業技術のディゲットとザイの普及に関しては多くの世帯が採用していたことが分かった。ディゲットはプロジェクトによって導入され、その積極的なアプローチによって採用する農民が多かった。ディゲットの設置において石を農地まで運搬することが重労働で課題点であり、プロジェクトはトラックを農民に貸与し対応していた。しかし、プロジェクトの参加後はトラックが高額で農民は借りることができず、自発的に増設する世帯は少なかった。一方、ザイは農地を観察して能動的に取得したものと、プロジェクトの講習会で取得したものによって、村内に技術が導入された。当初は技術に対する信頼性が低かったため、村内で採用世帯は増加しなかったが、時間とともに技術の効果が認識され、さらに、リーダーシップを持った特定の農民が指導を行っていたことから、採用世帯は急増した。継続に関して、ザイは日常で使う農具や資材を用いるため実践がしやすいこと。また、農民は伝統的な共同労働システムを活用し、対価交換で労働力を確保することができたことから、労働者が減少する中でも自発的に継続できた。

このことから技術の定着は道具や労働力の確保といった実践性があることが前提となっており、技術の信頼性が技術の採用や継続における農民数の増減に影響する一つの要因となっていたことが明らかになった。そして、自律的な普及を促す最適な方法は、在来の道具や資材、労働力等といった資源を同定し、それを利用した技術を選定し普及すること。また、リーダーシップを持った特定の農民に協力を仰ぎ、普及を促進させることである。ただし、農民や村全体の意見や立場を尊重して、普及活動協力の同意を得る必要がある。